

その後の道綱

はじめに

九条流の異端児摂政藤原兼家の二男道綱は、その母藤原倫寧女が『蜻蛉日記』の作者であるため、右大将道綱母との呼称をもって遍く知られるところだが、あいにく道綱自身の影は薄いのである。さらに、小野宮流藤原実資の記す『小右記』や『古事談』の説話に於ける道綱の風姿は、公卿としての無能と無才ぶりを露呈しているものばかりで、凡庸な人物像が定着するようである。

一方、『蜻蛉日記』には道綱の将来を夢解き、「みかどをわがままに、おぼしきさまのまつりごとせむものぞ」と、頂点を極める為政者への期待を記していることはともかくとして、おそらく『権記』長保二年(一〇〇〇)四月七日程にある「於一家為兄」を受けて、『栄花物語』(卷三、ひかげのかづらこ)では「よろづの兄君」と記される道綱の立場、境遇は、異母弟道長によって祭り上げられているとはいえ、兄弟間の熾烈な政治闘争に明け暮れる平安朝中期に於いて、たとえ大臣にならない悲運を託つ鬱屈した人生の表徴があっても、道長と共同歩調をとることによって安穩な人生を選び

久下 裕利

取った一公卿の足跡としてみれば、道綱のような生き方も処世の方法としては賢かったとも言えなくはないのである。そして、近來、坂本共展氏によって「凡庸で中宮権大夫・右大将・春宮大夫・東宮傳・中宮大夫(皇太后宮大夫)の要職を歴任し、大納言としての重責を二十三年間も務めることなどできるものではない」とする提言もあり、風説によっての人格認定は慎重でありたいところである。

本稿では天延二年(九七四)をもって閉じられる『蜻蛉日記』以後の道綱の動向を照射し、大納言兼右大将や東宮傳となる経緯を有能な政務官としての評価ではなく、政情の安定(知られざる闇の世界への関与を含めて)と、道長から頼通へと九条流の摂政の委譲を果たす道筋に、いわばその存在自体が寄与するところがあつたのではないかと思われる点を明らかにしたいのである。

I 左近衛少将から右近衛大将へ

道綱は永観元年(九八三)、左近衛少将となる。二十九歳の時であった。天元三年(九八〇)には兼家二女詮子が円融天皇の第一皇子懷仁親王(二

条天皇)を誕生させていた。皇太子の外祖父では満足できない兼家の権勢欲が花山天皇退位事件を勃発させることとなる。寛和二年(九八六)六月二十二日のことであつた。この事件を「兼家一家のクーデターとも言える政変」と加納重文氏が指摘する如く、^{注(2)}一家の浮沈をかけて兼家とその子たちのみで極秘に決行されたのである。道綱がいっきよに歴史の表舞台に躍り出た時でもあつた。その時の道綱が担った役割は何であつたのか。『扶桑略記』(増補国史大系)に拠ると、以下のようである。

夜半。天皇生年十九。出鳳闕宮。向花山寺。落飾入道。法号入覚。

藏人左少弁藤原道兼。僧蔽久。二人陪從。出縫殿陣。参元慶寺。

即時令左近少将藤原道綱持神璽宝劔。献東宮御在所擬華舎。件三人外他人不敢知之。禁省事秘故也。即夜。右大臣藤原兼家参入内裡。令固禁門。

『日本紀略』寛和二年六月二十三日条にも、「于時藏人左少弁藤原道兼奉從之」とあつて、兼家の意を受けた三男道兼が花山天皇を唆かし、禁中から花山寺(元慶寺)へ共に向かい、出家へと導くことになる。『大鏡』はこのドキュメントを次のように描いていた。

おりおはしましける夜は、藤壺の上の御局の小戸より出でさせたまひけるに、有明の月のいみじくあかりければ、「願証にこそありけれ。いかがすべからむ」と仰せられけるを、「さりとして、とまらせたまふべきやう侍らず。神璽・宝劔わたりたまひぬるには」と、栗田殿のさわがしまうしたまひけるは、まだ帝出でさせおはしまさざりけるさき

に、手づからとりて、春宮の御方にわたしたてまつりたまひてければ、かへり入らせたまはむことはあるまじく思ひて、しか申させたまひけるとぞ。
(小学館全集、六二頁)

事は全て道兼(栗田殿)一人の暗躍によって成就したというのだろうか。確かに『日本紀略』は前記に続けて「先于天皇。密奉劔璽於東宮。出宮内」と記すから、『大鏡』の「まだ帝出でさせおはしまさざりけるさきに、手づからとりて、春宮の御方にわたしたてまつりたまひてけれ」に符合する文脈といえよう。

しかし、三種の神器である曲玉(神璽)と宝劔を清涼殿の夜の御殿から道兼自身が「手づから」持つて、皇太子懷仁親王のもとへ渡したというのでは、事の迅速な展開が要求される中での所為とは考えられないから、天皇に近侍する藏人である道兼が、この陰謀の中心人物、^{かなめ}要になるにしても、『扶桑略記』の如く道綱が介在し、曲玉と宝劔を東宮の在所である擬華舎(梅壺)まで運び献したと考えるのが妥当であろう。^{注(3)}いやむしろ藏人左少弁の道兼でなく、左近少将である道綱こそが、劔璽に関わるのが相応しいと言つてよからう。

というのは、正常な即位式の場合、その前に行なわれる劔璽渡御儀(踐祚儀)に於いて、通例ならば劔璽使は内侍が勤めるのだが、諒闇踐祚の時は、左右近衛少将(冷泉天皇、後朱雀天皇、鳥羽天皇)が劔璽使となつてゐるのである。^{注(4)}そういう意味で、近衛少将である道綱の劔璽使的役割に注意したいところである。

それにしても兼家一家のクーデターとしては、嫡男道隆の姿が見えないし、二十一歳の末弟道長の姿も『扶桑略記』には確認できない。やはり道

兼、道綱そして僧叡久の「三人外他人不_三敢知_レ之」であったのであろうか。ところで、慈円『愚管抄』は次の如く、その道隆と道長の二人を登場させている。^(注5)

すでにとおぼしめしけると、道隆・道綱この人たちをまうけて、
「いまは璽剣わたるべくや」と申て、道隆・道綱、両種をもちて、東宮^{一條院}御方擬花舎へまいられりければ、右大臣まいりて諸門をとちて、御堂の兵衛佐にておはしけるを頼忠のもとへはつかはして、「かゝる大事いできぬ」とはつけ給てげり。

左近少将の道綱が一人で神璽と宝剣を携えるよりも、確かに右近衛中将である道隆とともに二人で分け持つ方が至当で、後朱雀天皇と鳥羽天皇の例では、左近少将が剣を、右近少将が璽を持ち、後白河天皇の時は、右近中将が剣を、左近中将が璽をそれぞれ分担し持っていたのであった。加えて擬花舎（梅壺）には皇太子懷仁親王ばかりではなく、母女御詮子も待ち構えていたであろうから、実兄の道隆が同行していれば、詮子に安堵感があつたに違いなからう。

しかし、どうも道隆の介在はなかった可能性が濃厚で、今井源衛氏は『小右記』七月十六日条の「停_二中納言道隆中将一門任_一」を挙げて、「道隆一門のみは、この度の榮進には外されたものらしい。あるいは道隆は、この陰謀に反対だったのであろうか」とされる。^(注6)現に翌六月二十三日に一条天皇が踐祚すると、右大臣兼家は自身を摂政に補任し、道兼を藏人頭に、道綱には藏人を兼ねさせ、そして道長を昇殿とする人事を断行する中で、道隆のみに変化はなかったのである。さらに萩谷朴氏が「恐るべき陰謀の

実行を目前に控えての、陽動的な行為であった」とする寛和二年（九八六）六月十日開催の内裏歌合に参加したのも、道綱と道長であつて、そこに道隆の姿は見えないのである。

また後年のことだが、兼家の腹心有国が花山天皇退位事件の功績に鑑みて、道隆ではなく道兼に関白を譲るべきだと進言したことを『古事談』が伝えているところを見ると、道隆の関与は薄いようなのである。それに対し、少なくとも『愚管抄』に記す、関白頼忠のもとに報告に走ったという道長（兵衛佐）の存在は認められてこよう。

さて、道綱の位階は、寛和三年（九八七）正月七日、末弟道長と同じ従四位上となるが、同年九月二十日には道長は従三位となって兄弟逆転してしまうのである。母を倫寧女とする道綱と、道隆、道兼そして道長の母が藤原中正女時姫であつても、その兼家の二人の妻の受領層である出自身分に大きな差があつた訳ではなかった。時姫が兼家の東三条殿に同居することになって、その正妻の座が確定したと増田繁夫氏はいう。^(注8)しかし、こうした道綱と他の兄弟たちとの昇進の差は、寛和二年（九八六）に皇太后宮となった国母詮子が道隆以下の兄弟と同腹であつたところによるう。決して道綱が父兼家に疎んじられたという訳ではないと考えられる。^(注9)

道隆でさえ寛和二年七月二十日に権大納言となり、同月二十二日に従二位、二十七日には正二位と位階を上げる。道隆が内大臣となる永延三年（九八九）二月二十三日には、道兼が権大納言となる。この日には道綱に昇叙はなく、従三位右近衛中将のままで、次に正三位となるのが、永祚二年（九九〇）のことであつた。この時道長も正三位となるが、官職は権中納言兼右衛門督であるから、エリートコースのただ中にいるという感である。

永延二年（九八八）十月五日のことだが、宮中の弓場始に於いて、出御の折、「三位中将候御剣、置北置物御机」（小右記）と、近衛中将の役回りとは言え、相変わらずの宝剣持ちを勤めているようだ。摂政兼家が見守る中で、権中納言道長、左兵衛督源時（道長室倫子の兄）、そして三位中将の道綱がそれぞれ矢を三度射て終っている。^{注10}

道綱が三位中将であったのは、永延元年（九八七）十一月二十七日から長徳二年（九九六）四月二十四日に中納言に補任されるまでの足掛け八年間で、その間正暦二年（九九二）九月七日に参議となっているから、これ以後は一般的に宰相中将と呼び慣わす。

長徳二年は道綱四十二歳だが、同年十二月二十九日には右大将となり、中納言が右大将を兼官とするのは異例の任用といえそうである。父兼家が四十二歳の時、同じく中納言兼右大将であったから、奇しくも父と同年齢に、同官職とは、川田康幸氏が言うように、「道綱の感激も一入であった」ことであろうし、「道長の配慮だとすれば、心憎いばかりの配慮」なのである。^{注11}そして翌長徳三年七月五日には大納言に補任されて、大納言兼右大将となるが、これも父兼家が貞元二年（九七七）十月十一日、兄兼通との権力闘争に敗れて右大将を解任されるまで歩みを同じくしているといえる。

ところで、道綱の右大将就任に寄せる感懐とは別に、右近衛府の長である右大将という官職は当時の政治状況や登用システムから如何なる地位として捉えらるるのであるか。本来近衛府は、天皇側近の武力機構として、皇権を守護する役を負っているはずだが、藤原摂関政治の成熟過程、とりわけ安和の変（安和二年（九六九）で左大臣兼左近衛大将であった源高明が失脚して、九条家師輔流の世となってからは、少・中・大将という近衛府上級官は、その昇進コースに組み込まれてしまい、藤原氏の独占的

現象を産み出し、それにもなつて軍事的・警察的機能を喪失していき、長官たる近衛大将の地位も次第に名譽職化してしまうのである。以上のような認識はおおよそ笹山晴生氏が述べるところだが、さらに左右大將在任者の系譜上の差にも着目して笹山氏は次のように指摘している。^{注12}

藤原氏の大將就任者を系図上にたどると、一般に当時の官位最高者で摂関の嫡系にあたる者がほとんどを占めるが、なかでも嫡系に左近衛大将が多く、主流以外の者に右近衛大将就任者が多い事情がうかがわれる。（略）九世紀前半までの藤原・源両氏以外の諸氏、ことに武官出身者は、ほとんど右近衛大将にのみ任命されている。（二二六頁）

つまり、近衛大将補任に関して、『官職秘抄』が「大臣、大納言、撰其人任之。但摂政関白家嫡、雖中納言参議任之。多左」とし、また『職原抄』に於いて「多是大納言中、譜第上臈任之。於執柄息者、越次所任也。又多被任左也」と記させるところも、摂関の嫡系に於いて右近衛大将よりも左近衛大将の方に名譽職化される傾向が確認され、道長前後の時代様相として近衛大将の本官が一般的に大納言（権大納言を含む）であることも知られる訳である。

安和二年三月二十六日、左大臣兼左大将であった源高明は大宰権帥に貶流される。同日、変の首謀者の一人と考えられる右大臣兼右大将の師尹が左大臣兼左大将に転じ、兼家の実兄伊尹が権大納言から正官に転じ右大将を兼ねることになった。翌安和三年（三月二十五日天禄に改元）には、右大臣から摂政となった伊尹にかわって、中納言であった兼家が八月五日に右大将を兼帯することになったのである。時に四十二歳であった。

一方、道綱母が『蜻蛉日記』で異常な関心をもって注視する安和の変は、実質的には円融（守平親王）擁立に関わる貞観殿登子（師輔二女、兼家と母妹）との親交や、源高明の後室であった愛宮（師輔五女）への同情をもつて窺い知られ、さらにまた藤原北家内部の他氏排斥に関わる抗争の犠牲が、かかる高明左遷という結果を導いてしまった訳で、兼家側に遺恨があったことではないから、道綱元服の加冠役を高明の異母弟で『公卿補任』に「三月二十六日依兄大臣事下殿上」とある大納言源兼明に依頼したのも、変の翌年の天禄元年（九七〇）八月のことであったのである。^{注13}

それにしても伊尹の極端な累進が、安和の変に於ける小一条家師尹側との提携の代償としてあったものなのか、それとも尚侍登子との結び付きを強めた結果なのか見解が分かれるところだが、摂政太政大臣にまで至った伊尹は、天禄三年（九七二）には四十九歳で没してしまうことになる。これ以後、覇権をめぐり兼通、兼家兄弟間の対立が激化する。

師輔二男で四歳年上の同母兄でありながら、兼通が安和二年参議に任官した時は、弟兼家は高位の中納言になった。^{注14}その不遇を一举に逆転する機会が到来したのである。それが長兄伊尹の他界であった。

権中納言兼通は、円融天皇の母后である故安子の「関白をば、次第のまにせさせたまへ。ゆめゆめたがへさせたまふな」（大鏡）と書かれた遺書をもつて、天禄三年十一月二十七日、内大臣で関白の宣旨を受けたのである。^{注15}

『公卿補任』の傍書には「執政人不經大將初例」とある。ただ大納言兼右大將という兼家の身分に変化はなかった。ところが、五年後の貞元二年（九七七）十月十一日、死期を悟った兼通は、関白を弟兼家には渡さず、従兄で補佐役として政権を支えた右大臣兼左大將の頼忠に譲ったのであった。さらにこんどは兼家の右大將を取り上げ、治部卿に貶したので

ある。道綱も左衛門佐から土佐権守に遷されることとなった（紀略、補任）。

同日、右大將には権中納言済時が任じられ、そして、左大將は頼忠が十一月三日に辞し、同年の十二月九日、兼通の男権中納言朝光が任じられたのである。この朝光の左大將直任に関して、笹山晴生氏は、「右大將から左大將への遷任が常態化していたこの時期としては、源高明についての異例のことであり、朝光のこの例が、藤原道隆（永祚元年）をへて道長以後の撰関家子弟の左大將直任の一般化への道を開くことになる」と述べている。

道隆は花山天皇出奔事件当時は右近衛中将でありながら、三十七歳の永延三年（九八九）八月八日永祚に改元。七月十三日、右大將を経ない直任の左大將となる。この時既に道隆は内大臣であったから、『公卿補任』には「任大臣後兼大將例」と記される。嫡嗣としての経歴、立場を整えたといえよう。三男道兼は三十歳の永祚二年（九九〇）六月一日、済時が左大將に転じたのにもなつて、右大將に補任される。正暦二年（九九二）には内大臣となるから、済時が大納言兼左大將であつて、常に左大將が高官の兼任になるとは限らないようである。

また兼家が摂政の期間（寛和二年（九八六）～永祚二年（九九〇））、左大臣が道長の義父源雅信であり、右大臣が藤原為光なのだが、永延三年（九八九）八月二日（紀略）の相撲抜出日に於ける還御の時の一件を、『古事談』（第一、王道后宮）が以下の如く伝えている。

一條院御時。永延比。相撲抜出日。還御之時。左大臣雅信候御劔。右大臣為光候御劔。前頭中将実資朝臣云。内宴及臨時事。乗輿之時。大臣大將持候御劔有^二其例^一。不^レ兼^二大將^一之大臣候御劔之事。無^レ例歟。云々。撰政同有^二許諾之氣^一。云々。

寛弘七年十月廿二日。還御本殿之時。諸大將公季内大臣候御劔前行。若宮。

還御の時、左大臣源雅信が宝剣を、右大臣藤原為光が璽箱を持ったというのだが、実資が言うところによると、大臣と言えども近衛大将を兼ねていなければ、天皇の宝剣を持候する例がないという。当該有資格者は、前記した如く内大臣で七月十三日に左大将の任に就いた道隆なのだが、不参加だったのか、道隆に身体的不具合があったのか、それとも摂家の驕慢なのか、終始道隆が宝剣に関わることはなかったようである。

『古事談』はこの一件の以下に注記して、寛弘七年（一〇一〇）の内大臣兼左大将公季の例を挙げている。公季は師輔九男で、長徳二年（九九六）八月九日、左大将を辞した左大臣道長の後を受け継ぎ左大将に就任する。

同年七月二十日に大納言から右大臣となった兼通一男顕光が、十二月二十七日に右大将を辞したのを機に、四月二十四日、中納言となったばかりの道綱が十二月二十九日右大将を兼帯することになる。これが前記した如く道綱四十二歳の時なのだが、長徳二年の人事異動に関しては、やはり道長の兄道綱に対する私的な配慮ばかりではなかったようである。

右大将となった道綱の姿を伝える好例は、長保元年（九九九）十月二十一日の弓場始で、『権記』に「能射右大将」と記されるぐらいであろう。^{注16}

道綱は長保三年（一〇〇二）七月十三日、大将を辞すことを許され、同年八月二十五日、権大納言となった実資は右大将を兼ねることになり、その後長久四年（一〇四三）まで四十二年間の長きに亘って実資は右近衛大将の地位にあったのである。

実資が『小右記』に書きとどめた道綱の多くの失錯と「僅書名字、不知一二者也」（長徳三年七月五日条）や「一文不通之人」（寛仁三年六月十五日条）

として道綱の無知文盲を言い、侮蔑、罵倒する。さらには長和二年（一〇三三）二月三日条では、長年公役を勤めない道綱を戸位素餐^{いそさん}の例として非難しているのである。^{注17}

こうした実資の悪口雑言は、右大臣顕光に対しても、例えば長和五年（一〇一六）一月二十九日の三条天皇讓位、敦成親王（後一条天皇）受禪の踐祚儀に際して、固関勅符に関する政務手続の順序を誤ったことを、「今日作法前後倒錯、聊記其方筆毫、可知只見略記、卿相出壁後嘲咲」と、辛辣な批判を浴びせているから、小野宮流を背負い余程の自信と気概があったのであろう。^{注19}

確かに実資は政務処理能力に長けていたのであろうが、顕光は長和五年、七十三歳の高年齢でもあり、老害として考えられなくもない。そして実資自身も『春記』長久元年（一〇四〇）十二月十日条によると、老齢で行幸に供奉できずにいるが、「天之所授有期歟」として、終身右大将を辞さない覚悟のようで、「此事天下之人多以謗訕」とある。その上諸事擁滞して、まさに老害この上ない事態に立ち至っているのである。時に実資八十四歳で、「彼右大臣已老衰人也」と『春記』には記してある。

加齢による物忘れ、痴呆あるいは手に負えない意固地さは、ある面いたしかたのない症状なのかもしれないが、四十五歳の時の右大将道綱としての失態が、『小右記』長保元年（九九九）七月九日条に記されている。それは東宮居貞親王行啓の際、東宮大夫であった道綱が右大将でもあったことを失念したのか弓箭を帯びていなかったため、諸公に嘲咲されたということである。実はその前年の長徳四年（九九八）七月二十日、道綱は辞書を上表したようなのだが、許可されなかった（公卿補任）訳で、長保三年（一〇〇二）七月十三日まで足掛け五年間、右大将の任にあったのである。

道綱の場合、公事が苦手なことは父兼家譲りの一面もあるが、その政務処理能力や資質を問う以前に、事にむかう気力の欠如こそ問題とすべきであって、左近衛少将から右近衛大将へと一貫して近衛の将官コースを歩んできた足跡が、『蜻蛉日記』天禄元年（九七〇）三月十五日、内裏の賭弓に参加した道綱が射手として活躍して以来、多少とも秀でていると思われる武芸の側面に由来する可能性をみたが、さらに次節で述べる武門源氏である源満仲・頼光父子との接点をみることによって、あるいは道綱に武闘派的資性があつたかもしれないのである。

それはともかく、紫式部が現実を目にした右大将は道綱ではなく実資であつたことは、『紫式部日記』寛弘五年（一〇〇八）十一月一日敦成親王五十日儀の祝宴で、式部は右大将実資に好感を持って接して確実だが、『源氏物語』葵巻での新斎院に供奉する右大将光源氏の、まばゆいばかりの姿への投影は実資像だったのであろうか。^{注(21)}

II 異母弟道長との関係

道綱は異母弟道長と行動を共にすることがしばしばあつたようである。前述した寛和二年（九八六）六月の内裏歌合への参加は、父兼家の命ずるところであつたろうが、『小右記』永延元年（九八七）四月十七日条に記される投石事件も、その偶発性に些か疑問の余地が感ぜられなくもないのである。

それは、賀茂祭の見物に於いて、右大臣為光の車の前を右近中将道綱・左近少将道長が車に乗ったまま横切するという非礼があつて、そのため為光の雑色車が壊れるほど石を投げつけたという事件である。両重将が父撰

政兼家に訴えたため、為光の家司が申文と過状（詫状）を提出した上に、為光自身も事の成り行きを心配して夜中兼家邸に赴いて謝ろうとしたが、異母兄兼家は会わなかったらしい。その後、『小右記』五月二十一日条によれば、為光の賀茂社参詣に当事者の道綱と道長が供をすることで和解、為光も志としてそれぞれに剣一柄を贈ることで一件落着となったようなのである。

この事件は、一条朝になって本格的な兼家政権の始動を意味する点で、いわば象徴的な事件となり得るのであろう。言い換えれば、摂政兼家と異母弟右大臣為光（雅子内親王腹）との政治的な位地関係を測り得る事件だつたと言ひ得るのである。つまり、山本信吉氏は、事の発端を「道綱・道長の軽率な行動」^{注(22)}（二二三頁）とする偶発的事件との認識で、この件で險惡な事態にしたいくない兼家は、為光の賀茂社参詣に際し、「為光に対する失礼を詫びるため供に」（二二四頁）道綱、道長を従わせたとする。これは太政官の掌握を未だ為光の力に頼らざるを得ない政情認識を示し、永祚元年（九八九）二月二十三日に、道隆が内大臣に、道兼が権大納言に任命されるに及んで、「兼家にとって太政官の運営をその子息を中心として行う体制がようやく整った」（同）とした。しかし、『小右記』に見える為光の行動にはいかにも卑屈さがにじみ出ているといえよう。わざわざ訪ねてきた為光を追い返し、家司・雑色長等に召名の処分を下す処置は、兼家の方に事態を穏便に収めようとする気配が微塵も感じられないのである。これは為光にとっては、今井源衛氏が言うようにまさに屈辱であつたに違いないであろうし、剣を贈るもの「甥の御機嫌とりに専心努めている」^{注(23)}（二二五頁）と判断でき得るのである。

前述したように寛和二年には花山天皇出奔・出家事件があつた。その誘

因に為光二女、弘徽殿女御祇子の死があったことは誰もが認めるところである。山本氏も前掲論考に於いて以下のように述べている。

女御祇子の死去と花山天皇の突然の退位・出家は、将来に可能性が予想された為光の執政への道を閉ざしたが、一条天皇を擁して権力を確立した兼家にとって、為光の存在は政権の維持・運営にとって欠くことができない重要性を持っていた。執政としての兼家の最大の弱点は、左大臣源雅信に対抗し、兼家の意を帯して議政官として太政官の運営に当る信頼すべき公卿が乏しかったことである。前述したとおり子息道隆・道兼・道長らは、いかに兼家がその昇任を計ってもまだ若年であり、経験も浅く、大臣への途は遠かった。前述のとおり兼家が摂政就任時の大納言は藤原為光、源重信、権大納言は藤原朝光、同済時の四人で、このうち公事にも練達し、信頼が置けると考えられたのが藤原為光であった。このため兼家は為光を自身の後任の右大臣とし、左大臣源雅信と拮抗させながら、太政官の掌握に務めたと思われる。

(二二頁)

確かに異母弟為光は、兼家にとって政権の維持、運営上、必要な人材であったに違ひなからうが、確執のあった実兄兼通に重用されていた為光の心底を見極めることも重要なことであつたろう。花山天皇の退位が、懷妊していた祇子の死去よりも、為光から全てを奪ったことになりはしまいか。^{注24}そしてこの早すぎた退位への疑念はなかったものであろうか。

歴史にはもしもという仮定は成り立ち得ないが、花山天皇が在位していれば、為光には祇子を含めて美しい五人の娘がいたから、花山が祇子の倅

を慕うならば、そういう三女以下の娘の入内も可能性があったはずだ。祇子薨後五ヶ月の寛和元年(九八六)十二月五日には為平親王女婉子が入内していたし、^{注25}村上天皇が寵愛する安子の没後、妹登子を入内させ寵遇したことを、兄弟である兼家は間近に知っていた。だからこそ、祇子の死によって道心の深まった花山天皇をいっきに退位に追い込む必要があったと考えたい。その後の為光に少しでも疑念があったならば、「兼家に対して意を尽して奉仕」(山本前掲書二二三頁)することはなかったであろう。

為光の娘は、こうして政治的事件にいやおうなく関わっていく。まさに退位した花山法皇が第四女に通うこととなり、^{注26}第三女に通っていた内大臣伊周は、法皇の相手がつきりこの三女と誤解し、実弟隆家が矢を射かけるといふ、いわゆる花山法皇奉射事件が起きたのである。この不敬事件が伊周・隆家配流の理由の一つとして挙げられている(小右記)。実はこの事件が、道長と伊周(道隆息)、叔父甥の主導権争いとして史上に現象しているものであり、奇行が目立つ花山は二度も政治上の掛け引きに利用された感が強いのである。^{注27}

長徳二年(九九六)、花山法皇奉射事件によって内大臣伊周は大宰権帥へ、また中納言隆家は出雲権守に左降される。その決定が四月二十四日のことだから、四十二歳の道綱が中納言に補任されたのも同日で、形の上からは隆家の跡を襲ったことになる。ただ長徳元年夏には疫病が大流行し、関白道兼以下、左大臣源重信、大納言朝光、済時、権大納言道頼等、納言以上の公卿が七名(糖尿病の道隆を除く)も薨じているから、そうした混乱状態に乗じた道長による覇権奪取と特異な人事異動であつたともいえる。とりわけ身内たり得る二十五歳の道頼の死は、道長にとっても痛手であつたはずだ。道頼は道隆の一男だが、伊周、隆家そして定子とも異腹(母藤

原守仁女)で、父に疎まれ、祖父兼家が可愛がり猶子としていた、将来を囑望される若き貴公子だったのである。^(注28)

父兼家に重用された源時中がいるにしても兼家にとつての為光のような身内の片腕が道長にも必要であつたに違ひなからう。みずから内覧にとどめることで太政官にも目が行きとどく立場を工夫したが、^(注29)政権運営にはいかにも持ち駒不足という感は否めないだろう。そこで凡庸でも従順な身内である異母兄道綱を参議から、上卿となり得る中納言にとりあえず登用したというのがおそらく実情で、その太政官としての力量を評価した訳ではなからう。長徳三年(九九七)に左大臣道長、右大臣顕光、内大臣公季(宮腹で道長の叔父)という顔ぶれで政権運営が始まることとなる。^(注30)道綱は右大將を長徳二年十二月二十九日、二十七日に辞任した顕光から受け継ぎ、さらに長徳三年七月五日には大納言に補任されると同時に内大臣となつた公季にかわつて東宮大夫も引き受けることになる。

道綱が大納言に補任された時、『小右記』記主実資が、前述した如く名字ぐらゐしか書けない者と道綱を蔑んだのである。しかし、長徳元年から三年までは政変といつていい混乱期で、^(注31)そうした実資の個人的憤慨ないし嫉妬をはるかに越える政情にあつたといえよう。

当時、権中納言兼右衛門督であつた実資とて、長徳元年(九九五)四月二十五日から翌二年九月二十五日まで検非違使別当として伊周・隆家追捕^(注32)に関わっている。

別当実資は一条天皇から直接命を受けて、搜検等の指示にあたつたようである。長徳二年四月二十四日、伊周を大宰権帥、隆家を出雲権守に追下すべき仰せがあつたが、両名は定子中宮の御在所である二条北宮に隠れ潜み従わない。五月一日に至つて、警察機構の実動部隊である検非違使が定

子御所に突入し、隆家を捕えるが、伊周は愛宕山方面に逃亡したらしい。^(注33)

同日の『小右記』には「右大將以下諸卿候雲上、余詣右府宿所、謁談之後、黄昏退出」とあつて、実資は右大臣道長とも相談の上、事にのぞんでいる様子を伝える。前の別当で右大將である顕光も常に参内して対処していたようである。こうした動向に照らしてみれば、道綱が同年十二月二十九日に顕光に替つて右大將に任用されるのも、この一件が落着いた後であつた。

晩年道長に「至愚之又至愚也」と罵倒された顕光と道綱との関係は、私的には微妙で、道綱が「不_レ異禽獸_二者也」と非難された周知の『古事談』(第一、王道后宮)の逸話がある。宮中の酒席に於いて舞を舞つた大納言道綱が冠を落とす失態を演じた時、右大臣顕光の嘲詞に対して、「妻ヲバ人ニクナガレテ」と顕光の北の方と密通した旨の暴言を吐いたということである。^(注34)この話自体は、後世に無能の烙印を押された兩人の目屎鼻くそを笑う類の掛け合いと見做せば事足りるが、問題は道綱に長保二年(一〇〇〇)〇七月、兼経が誕生し、その母が道長の正妻倫子と同腹の妹だということだ。

道綱と倫子妹(源雅信女)との結婚は、『栄花物語』(巻七、とりべ野)によると、道長と倫子とが積極的に推しすすめたらしい。結婚の時期は未詳だが、従来道綱の前妻が、長徳四年(九九八)八月に死去して、その喪明け後の結婚として考え、なお倫子妹も兼経出産後亡くなっているから、その間わずか一年程の結婚生活であつたとする。しかし、『栄花』(同)には「御仲らひなどのいとめでたう、この北の方の御ゆかりに世のおぼえもこよなかりつる」と記されるところからすれば、^(注35)倫子ともどもの雅信家とのつながりによって得た信用評価があつたはずで、既に大納言兼右大將となつていた道綱にとつて、それはどのような「世のおぼえ」だったのか些

か疑問がなくなる。

その上、従一位左大臣源雅信は、正暦四年（九九三）七月二十九日に七十四歳で薨じているから、むしろ身寄りのない妹を安じた姉倫子の配慮による結婚とも考えられよう。そして、長保元年（九九九）には雅信七周忌法事が『御堂関白記』（七月二十九日条）に記されることになる。参列者は次の面々であった。

右大将（道綱）・源大納言（時中）・藤宰相（懷平）・源宰相（俊賢）等、
殿上人多来、俸物有所々、（大日本古記録本）

道綱を冒頭に記す理由は、雅信の娘である倫子妹の婿であったからであろう。それにしても平安時代の上流貴族にとって複数の妻の元に通うことに何らの障碍もないから、道綱と倫子妹との結婚を、道長と倫子とが結婚した永延元年（九八七）十二月十六日以後、雅信が薨する正暦四年までの間とすることも一案だが、それではまた仲睦しい二人の間にいつまでも子が授からないことにもなり確定はできないようである。ともかく顕光のことを語らない『栄花』の意図と、生まれた兼経を道長の猶子とした事實は、道綱を取り込むとする道長側の意図を感じさせよう。

雅信七回忌の翌月、八月四日には去年他界した道綱の妻の周忌法事が法興院に於いて行なわれている（小右記）。この妻は、いったい誰なのであろうか。一男道命の母源広女なのか、それとも二男斉祇の母藤原季孝女②なのであろうか。坂本共展氏は、父兼家が自邸二条院を仏寺にした法興院に於いて、「多数の公卿の参会のもとに」行われるのは、「大納言春宮大夫室・前関白女の為に相応し」として、貴子腹ではない道隆の娘なのであ

ろうとした^{注36}。その道隆女には第三男子兼宗が誕生したが、彼と第四男子兼経以外の道綱の子女たちが、道長政権下に於いて如何なる境遇、立場にあったのかということを、むしろ本稿では考えていきたい。

それは、『紫式部日記』冒頭、土御門邸に於ける道長女中宮彰子の安産祈願である五壇の御修法の場面に立ち現われている。寛弘五年（一〇〇八）七月二十日の未明のことである。

齊祇阿闍梨も、大威徳をうやまひて、腰をかがめたり。人々まゐりつれば、夜も明けぬ。……（道長と式部との女郎花を交えての歌のやりとり）
……しめやかなる夕暮に、宰相の君とふたり、物がたりしてゐるに、
殿の三位の君、すだれのつまひきあげてゐたまふ。

（萩谷朴『紫式部日記全注釈』角川書店、昭和46年）

大がかりな修法の模様を、観音院の僧正、法住寺の座主そして浄土寺の僧都と名だたる高僧の姿を動的に写し描いた後に、五壇の西壇の大威徳明王を腰をかがめて礼拝している「さいさ阿闍梨」に目をとどめて、その描出を終えている。「さいさ」は「さいき」の誤写と考証され、阿闍梨の名を「斉祇」と認めるに至っている。つまり、道綱の二男斉祇なのだが、この場面で式部が目を止めている理由は、道綱の二男だからというのではなく、親密な「宰相の君」の姉弟だからというに他ならない。とどのつまり宰相の君も道綱の娘で豊子なのである。

豊子が「宰相の君」と呼称されるのは、父道綱が参議であった正暦二年（九九二）から長徳二年（九九六）までの間に、彰子に仕えるようになって宰相の女房名を得たのであろうし、また出産直前に殿の北の方倫子とともに

に几帳の内に控えた時には「讃岐の宰相の君」と記されるのは、当時の夫である大江清通が讃岐守であったからであろう。

豊子が道長家に仕える上臈女房の処遇を受け、従妹彰子に近侍するとともに、その出産を間近に見守り、皇子（敦成親王）誕生後の御湯殿の儀では産湯使いの役を果たすという重要な役回りを任されていて、余程の信頼を得ていたことが知られる。さらに生誕当日に於いて「讃岐の」とわざわざ紹介される意味も、夫の存在を示すばかりではなく、五十日の祝儀に於いて禁色を許された「少輔の乳母」が、『栄花物語』（巻八、はつはな）の「讃岐守大江清通が女左衛門佐源為善が妻」と対照されて、豊子の娘である可能性があるからである。^{注(38)}

一方、斉祇は、最年少、最下臈の阿闍梨でありながら、観音院僧正勝算の門弟であったことでもあり、この五壇の御修法に加わることになったのであろうが、『紫式部日記』冒頭場面、道長と息頼通（殿の三位の君）父子の栄華を形作る敦成親王（後一条天皇）生誕の場にしっかりと据えられ、道綱の子女として豊子とともに道長の権勢が及ぶ境遇にあったということである。

ところで、萩谷朴氏は斉祇の年齢を二十六歳と考証するから、^{注(39)} 倫子妹のお産の折、故源雅信の一条殿を避け、吉方ということで「中川の某阿闍梨」の別宅に移ったと『栄花』（巻七、とりべ野）には記されていたが、それは長保二年（一〇〇〇）であって、八年前のことだから、その「某阿闍梨」が斉祇ということにはならない。倫子妹が必ずしも道綱の近親者を頼らなければならぬということはないが、「某阿闍梨」とは道綱一男道命であった可能性が大いにあるのである。道綱母は天延元年（九七三）八月、中川に転居していたのであった。

道綱の一男道命は、花山天皇に殿上童として近侍していた。父道綱が寛和二年（九八六）の花山天皇出奔事件に於いて果たした役割は前述したが、『日本紀略』（寛和二年六月二十三日条）に拠れば、花山天皇の剃髪入道の師が権僧正尋禅であって、その尋禅に尋光（為光息）らとともに道命は花山の後を追って入室したらしいのである。三保サト子氏の指摘に拠れば、この時、道命は十三、四歳で、長保三年（一〇〇二）十一月一日に道命は延暦寺惣持寺最初の阿闍梨に補せられたのであった。^{注(40)} 道命が二十八、九歳の時阿闍梨となったから、兼経誕生の一年後となって『栄花』に「某阿闍梨」と記されるためには年紀的には矛盾となり得るが、『栄花』作者が後に阿闍梨となった道命をこう書き記すことは有り得よう。^{注(41)}

仏門に入った道命に何故これほど拘泥するのかというと、父子がともに三条天皇（母兼家女超子）にも関わるからである。^{注(42)} 道綱は長徳三年（九九七）七月五日、大納言兼右大将となるが、道長政権下となって誰も引き受け手がない花山天皇の異母弟である東宮居貞親王（三条天皇）の大夫も兼ねることとなり、寛弘四年（一〇〇七）一月二十八日には東宮傳に転じたのである。東宮傳はふつう大臣の任とすべき名譽職だから、伊藤博氏が言うように、「表面的には、道長は道綱を一家の長老として遇していた」といえる。^{注(43)}

敦成親王五十日儀に於いて傳大納言道綱も参会していたはずだが（小右記、『紫式部日記』には右大将実資や左衛門督公任との戯れが叙されているが、道綱はその名さえ記されることはなかった。しかし、寛弘七年（一〇一〇）一月十五日の彰子所生二宮敦良親王五十日儀には、「實子に、北むきに西を上にて、上達部、左、右、内の大内殿、春宮の傳（^{（齊信）} 絵巻本文、中宮の大夫、^{（公任）} 四條の大納言、それよりしもは、え見はべらざりき」とあつ

て、左大臣道長、右大臣頼光、内大臣公季、春宮の傳道綱と順列を違えず書き、日記は結尾にむかうが、豊子自身が敦良親王の乳母であったから、^(注44)この道綱の日記末尾の登場は、冒頭の斉祇への注視が宰相の君豊子への関心と連動してあったことと首尾照応される訳である。

その寛弘七年一月二十六日条の『権記』には、「此曉更傳殿姫君亡去」と記されていて、このため除目が延期となったという。いったいこの姫君の母は誰なのであろうか。同じく『権記』長保三年（二〇〇二）三月二十七日条には、「右大將姫君著裳」とあるから、この姫君が他界したということなのだろう。前述したように、道綱は長保二年七月に北の方（倫子妹）を亡くして、その子兼経の乳母となった弁の君とも関係をもっていた。^(注45)しかし、着裳という限りに於いては、この時点で幼くとも十一、二歳の姫君が道綱にはいたということなのである。

前掲三保サト子「道命阿闍梨伝考」は、道命家集中に「いもうとのうせ給へる」とあるのを、この亡くなった姫君と考え、さらに姫君の母が源頼光の娘である可能性をいう。従来、道綱が頼光の婿となるのは、正妻倫子妹没後のこととするから、例えば二、三年後に結婚して直に姫君が誕生したとしても、この亡くなった姫君はせいぜい六、七歳である。寛弘七年に前記推定から道命の年齢は三十七、八歳で異腹の幼い妹への哀傷歌が家集に載る。それにしても結婚を前提とする通過儀礼である着裳した姫君は、この頃二十歳程になっているはずだし、他に道命には「はらから」（豊子か）もいて、道綱には史料的に確定できない不明の子女がいるということであろう。

幼い姫君が頼光の娘と道綱との間に誕生していたとすると、道命がその姫君を知っているという現世的な関わりをもつ。そしてその場が頼光邸で

あった可能性が大きいのである。『小右記』長和二年（二〇一三）六月二十三日条に「彼中宮大夫住_二頼光宅_一、依_レ為_レ聲」とあり、さらに長和五年二月十日条にも「一昨祭使從_二大納言道綱家_一」^{一条頼光家}「出立」とみえ、道綱は本宅の大炊御門邸には居ず、頼光の娘婿となつて一条頼光邸に住んでいた。その一条邸は、もともと藤原倫寧の邸宅であつて、道綱が生まれ育つた家であり、母をはじめ理能・長能兄弟が康保四年（九六七）の十一月まで住んでいた所なのである。^(注46)その上、倫寧と頼光は従兄弟関係にあったのだから、道綱が婿となつて頼光邸に住むというのも至極道理なのである。

道綱が頼光の娘婿となつたのは、姫君誕生との関係で、長保四、五年（二〇〇二～三）頃と推定して、^(注47)それはちょうど道綱が東宮大夫であり、頼光がその部下の東宮大進であつた時期である。周知の如く、源頼光とその父満仲一統は、花山天皇出奔事件そして伊周配流事件に於いて常に関わつた武装集団である。^(注48)

実は、『大斎院前御集』の「実方の兵衛佐の懸想する満仲が女を、道綱の少将得つ」と『道綱母集』との関連によれば、満仲の娘を実方と争い、左近少將道綱が母の代作歌によって求愛に成功したらしいのである。^(注49)『蜻蛉日記』天延元年（九七三）四月二十三日には、源満仲邸が盗賊団に襲われ、放火されたことがみえる。一条にある作者の家と満仲邸が近くにあったのだが、そのおおよそ十年後ぐらいのことなので、ちょうど花山天皇出奔事件があつた寛和二年（九七三）の二、三年程前ということになろう。

つまり、頼光を道長に推輓したのは道綱の可能性があり、頼光は美濃等の国司を歴任して蓄えた財力をもつて、寛弘年間に於いては既に道長の家司受領的存在となつていた。長和五年（二〇一六）のことだが、土御門邸が七月に焼亡し、その再建に際し、伊予守であつた頼光が新邸の家具調度

類の一切を献上したことなどは、その最たるものであろう（小右記六月二十日条。栄花物語卷十四、あさみどり）。さらに、一条邸の購入も娘婿の道綱のためというふうを考えるのが妥当で、その時期は寛弘年間を想定しておこうと思う。

道綱や頼光が官職として三条天皇（居貞親王）の傍らにあったからといって、それは摂関家である道長の意向を反映してのことと捉えておくべきであって、三保サト子氏の言うような三条天皇の近臣群を形成していた訳ではあるまい。しかし、いっけん外から見れば、そうした近臣群と錯覚することはあり得よう。「寛弘六年冬傳大納言道綱歌合」に道命が参会し、道命との交渉が拓けていくのもこうした点にあったのであり、三条天皇が悪化する眼病の平癒に道命一人を召して読経させる（小右記、長和四年（一〇一五）閏六月十二日）ということも、三保氏が指摘するように、道長を慮って天皇のために祈る僧がいなかったからである。だからといって、三条天皇と道長との不和軋轢が即位当初からあったのではない⁽⁵¹⁾。

道長は娘の尚侍妍子を三条天皇即位の一年前、寛弘七年（一〇一〇）二月二十日に入内させている。そして御子誕生前に妍子を中宮として、中宮であった彰子を皇太后に、皇太后であった遵子が太皇太后となったのが、寛弘九年（一〇一二、十二月二十五日長和に改元）二月十四日のことであり、同日道綱は中宮大夫を引き受けることとなった⁽⁵²⁾。

寛仁元年（一〇一七）六月二十七日のことだが、妍子は亡き三条天皇の四十九日の法事の帰りに三条の源濟政邸に渡御した。三条院の近くにあったことと濟政が従兄妹関係にあり日頃話し相手となっていたというのが藤谷寿氏の推論だが⁽⁵³⁾、むしろ倫子の甥濟政も頼光の娘婿であって、濟政邸も頼光が買い与えていたという憶測の方が信憑性がある。『御堂関白記』

寛仁元年五月二十四日条に、「頼光朝臣非時、以絹・紙・折櫃物等也、雖物忌参院、定御法事」とみえ、三条天皇の法事のことを定めたとある。もちろん六月十三日の「院五七日御法事」のこととも考えられるが、いずれにしても頼光が非時（食事）をはじめ諸事の準備を整えたといえよう。

八月二日、中宮妍子はようやく濟政邸から道長の一条邸に移ることになった。家主濟政に対して摂政頼通が与える賞を濟政は娘婿の定頼（公任息）に譲って、一階を加えて正四位下としたのである。その定頼と道命との交友が『定頼集』や『道命阿闍梨集』から知られ、とくに後者の詞書には「定頼の少将」とあって、寛弘七年（一〇一〇）三月十五日の石清水臨時祭に定頼が舞人を勤めた時の贈答歌と察せられる⁽⁵⁴⁾。定頼は長和三年（一〇一四）十月五日右中弁に中宮権亮を兼ねることにもなっていて、翌長和四年（一〇一五）九月二十日には枇杷殿より還御の中宮御給により亮に昇進している（公卿補任）。

三条天皇および妍子中宮に、東宮大夫、東宮傳そして中宮大夫として奉仕する道綱、さらにその背後にいる頼光と寛弘から長和にかけて、道命は僧侶としての側面ばかりではなく歌人としての足場を築いていたようなのである。道命の歌才は『蜻蛉日記』作者の孫に引き継がれていたということであろうか⁽⁵⁵⁾。道命の三条天皇追悼歌が二首（あしひきの山郭公このころはわが鳴く音をや鳴きわたらん）「いかならん聞かばや死出の山桜思ひこそやれ君がゆかりに」、『栄花物語』（卷十三、ゆふしで。卷十四、あさみどり）に書きとめられている。

道綱は、父兼家の好色性も確かに受け継いだといえようが、母の歌才とは、和泉式部との贈答歌は知られはするものの、だいぶ無縁なようであった⁽⁵⁷⁾。しかし、この時期の政情に鑑みていえば、異母弟道長が外戚関係を

築くことができずにいた三条天皇の東宮時代から近侍し、形としては済時女城子腹の敦明親王をはじめとする皇子たちへの障壁となり、反勢力化する氣遣いのいらぬ道綱に委ねられていたともいえよう。それを体のよい身内化などということもできようが、幼い頃から培ってきた信頼感が道長の方にあつたとも考えられよう。

ともかく『蜻蛉日記』作者に一人子として溺愛され、それが覇気のない人格形成に関わるようなのだが、むしろ幸いして、姉妹の入内などという問題が生じなかったことで、兄弟同士の覇権争いが回避され、道長が道綱を兄としてむかえ入れた大きな要因であつたといえよう。さらに加えて言えば、何より花山天皇出奔事件や奉射事件という政変の裏事情に通じていて、その上背後に武門源氏の頼光を抱えているという、いっけん無気味な存在だともいえよう。

道長は嫡妻倫子（源雅信女）と正妻明子（源高明女）^{注(58)}とに多くの子女をなすが、その元服や着裳の儀に関して『御堂関白記』に詳しく記録されている。例えば、寛弘元年（一〇〇四）十二月二十六日には明子腹の頼宗・顯信の元服に於いて、加冠役を東宮大夫道綱と右大将実資とでつとめ、同三年十二月五日の教通（倫子腹）と能信（明子腹）の元服では、加冠は右大臣顯光と東宮大夫道綱であつた。また明子所生だが倫子の養子（公卿補任、治安二年へ一〇二二〃尻付）となつた長家の元服は、寛仁元年（一〇一七）四月二十六日で、加冠は中宮大夫である道綱がやはり務めている。このように道綱が確かな身内^{ミウチ}の役割を果していることが知られるのである。

寛仁二年（一〇一八）十月七日、道長女尚侍威子が後一条天皇（敦成親王）の中宮に立つと、妍子が皇太后となり、それにともなつて道綱も皇太后宮大夫に転じている。^{注(59)}三条上皇と妍子皇太后とは長い縁であつた。

『小右記』寛仁四年（一〇二〇）十月十六日条に「入道大納言^{道綱}、去夜入滅」と記される。享年六十六歳である。「あはれなる世の中なり。北の方いみじう思し嘆きたり。頼光もいみじう口惜しきことに思へり」とは、頼光父娘の悲しみを『栄花物語』（巻十六、もとのしづく）が叙するところであつた。

注

（1）坂本共展「紫式部と『蜻蛉日記』」（『源氏物語と日記文学 研究と資料12輯』武蔵野書院、平成4年）

（2）加納重文「寛弘までの道長―道長論前史―」（京都女子大学「女子大國文」116、平成6年12月）

（3）陰謀の首謀者はもちろん兼家なので、山本信吉『撰関政治史論考』（吉川弘文館、平成15年）は『黄葉記』寛元四年（一二四六）十月十七日条に記す兼家を摂政に任じた詔書の中に「皇太子未親^ミ万機^{マニ}之間」とあるのを示し、「詔中一条天皇を幼主と表記せず、皇太子としていることは、この詔が、一条天皇の践祚以前に花山天皇の退位を事前に予測し、円融法皇と兼家との間で用意されていた詔であつたといえよう」（二八一頁）とする。つまり周到に準備されていた陰謀といえよう。

（4）加茂正典『日本古代即位儀礼史の研究』（思文閣出版、平成11年）「平安時代における践祚儀（寛書）―劍璽渡御を中心として―」の調査に拠る。但し加茂氏はこの一条天皇への渡御を受禪践祚の例としている。その場合も劍璽奉獻者が内侍ではなく左右近衛中将となるのが、後一条天皇、堀河天皇、高倉天皇、安徳天皇の時である。ただ本事例は特異例である。

（5）『愚管抄』の引用は岩波大系本（二六八頁）からで、片仮名を平仮名に改めた。

(6) 今井源衛『花山院の生涯』(桜楓社、昭和46年、改訂再版) 一二七頁。

(7) 萩谷朴『平安朝歌合大成二』(同朋舎、復刊昭和54年) 六〇五頁。

(8) 増田繁夫『源氏物語と貴族社会』(吉川弘文館、平成14年) 九二頁。

(9) 『蜻蛉日記』には道綱母が養女をむかえるのも表面的にはその娘を入内させ、后妃ともなれば、道綱の栄達に関わるとの判断からであろう。

(10) 射手三人が三度射ることが儀礼のようだ。なお『春記』長暦三年(一〇三九)十二月二十七日条に、同じく弓場始の折、「左少将定房候御剣」とある。近衛少・中将の役目なのであろう。

(11) 川田康幸『『栄花物語』における藤原道綱像―その叙述の特色―』(信州豊南女子短期大学紀要) 8、平成3年3月。

(12) 笹山晴生『日本古代衛府制度の研究』(東京大学出版会、昭和60年)。以下、同氏の説の引用は同書に拠る。

(13) 水野隆「兼家―蜻蛉日記から見た冷泉朝における兼家―」(『一冊の講座蜻蛉日記』有精堂出版、昭和56年)。なお兼家と登子との不和の原因を、従来考えられている兼通ではなく伊尹への登子の接近とする。

(14) 安和の変に兼家が直接関わったことを示す史料はないが、山中裕『平安人物志』(東京大学出版会、昭和49年)「藤原兼家」は「兼家が師尹^{マヤ}とともにこの事件に何か力をかしていることは否定出来ない」(五三頁)とする。ママとした「師尹」は文脈からして「伊尹」のはずで、筆者はそうように解して引用した。

(15) 山中裕前掲書は、この『大鏡』の逸話を円融天皇の藏人で伊尹の家司であった平親信の『親信卿記』に「前宮遺命」とあることをもって裏付けとして史実と認められるとする。それを隴谷寿『藤原氏千年』(講談社現代新書、平成8年)が「伊尹の遺命」(九八頁)とするのは不可解である。

(16) 伊藤博『蜻蛉日記研究序説』(笠間書院、昭和51年)「蜻蛉日記と藤原道綱」に付される「藤原道綱年譜」によって大略確認できる。なお『小右記』『御堂

関白記』は東京大学史料編纂所「平安遺文フルテキストデータベース」によって検索可能である。

(17) 『小右記』の随所に見られる道綱の失儀に関して、「道綱の母方の祖父、藤原倫寧は小野宮実頼の家司であり、その孫の道綱の下方に立つことは実資にとって耐え難い屈辱だった」(松原一義『『小右記』とその周辺の文学』へ稲賀敬二編著『論考平安王朝の文学 一条朝の前と後』新典社、平成10年)とは誰もが認めるところだが、その上で前掲伊藤博論考(『藤原道綱伝―蜻蛉日記の基礎的研究として―』『平安文学研究』昭和43年12月)は「実資の強い対抗意識のなせるわざ」と考え、また前掲川田康幸論考では道綱に官を二度も超任されたことを主体に考えている。

(18) この時の劍璽使は、実資男左中将資平が宝剣を、右中将源雅通が璽箱を持ち務め、左大臣、左右大將が相副い、皇太子敦成の居る土御門邸にむかう(『小右記』)。なお『御堂関白記』一月十三日条には、道綱以下の上達部が道長邸に参集して讓位並び即位の事を定めたところ。

(19) 大津透『日本の歴史第6巻 道長と宮廷社会』(講談社、平成13年)は、顕光の失錯は枚挙にいとまないとして当例を挙げ懇切に説明している。なお寛仁三年(一〇一九)六月、実資が上卿となつて顕光、公季両大臣が二年間処理できずにいた十三カ国の諸国申請雑事を見事に陣定で処理したことを紹介している。

(20) 軍事貴族などという呼び名で知られるところだが、元木泰雄『源満仲・頼光』(ミネルヴァ書房、平成16年)に拠る武門源氏という用語を使う。

(21) 坂本共展「右大將源氏の本官」(『中古文学』54、平成6年11月)は、葵巻の光源氏の官職を右大將に東宮傳を兼ねるとし、この官職例の準拠を長徳元年八月二十八日、二十二歳で東宮傳に任ぜられた内大臣伊周ではないかとする。

(22) 山本信吉前掲書。

(23) 今井源衛前掲書。

(24) 為光一女の婿権中納言義懷も花山を追って出家してしまう。

(25) 中村康夫「花山天皇出家事件と為平親王の野心―栄花物語と大鏡との比較から―」(『講座平安文学論究第七輯』風間書房、平成2年、のち『栄花物語の基層』風間書房、平成14年)は、この入内を叔父である為平が花山の心を慰める方法としてあったとする。

(26) 『栄花物語』(巻四、見果てぬ夢)に「寝殿の上とは三の君をぞ聞えける。御容貌も心もやむごとくおはす」とある。角田文衛『平安人物志下』(法蔵館、昭和60年)「為光の娘たち」に詳しい。

(27) 後年為光第三女は隆家と結ばれ、また第四女は花山崩後、道長の妻妾となっている。あくまで真相は闇であるが、奇怪な結果の背後に、花山院の別当(坂本共展前掲注(1) 論考)であった道綱が絡み、隆家の裏切り等を想定すれば、伊周排斥という陰謀の匂いを嗅ぎとることもできよう。但し土田直鎮『日本の歴史5 王朝の貴族』(中央公論社、昭和48年)、山中裕『平安時代の古記録と貴族文化』(思文閣出版、昭和63年)の両視点は陰謀説を否定している。

(28) 道隆と高内侍貴子との結婚に兼家は不満であったらしいが、貴子に三男四女が誕生したことが幸いしたのであろう。花山天皇出家事件に道隆が協力しないのも、この時期父兼家との間に確執が生じていたとも考えられる。また前記しなかったが、為光の賀茂社参詣に道綱、道長とともに右少将道頼も同行して剣一柄を贈られている。

(29) 森田悌『平安時代政治史研究』(吉川弘文館、昭和53年)は「正式の摂政・関白になると官符作成の上卿になれないのに対し、内覧であれば、それが可能であることから」とする。

(30) 公季は兼家にとっての為光の立場となり、のち太政大臣にまでなるが、実権のある兼家や道長に反意するところがない。

(31) 長徳二年のみを「長徳の変」とする限定認識にはない。なお龍谷壽「摂関時代と貴族―文人貴族の地方官に触れて―」(『歴史物語講座第七巻 時代と文化』風

間書房、平成10年)は、実資を越任しての道綱の任大納言を「家格」という用語で説明するが、賛意しがたい。

(32) 権中納言兼衛門督の使別当となるケースが多いことは、拙稿「蔵人少将について―王朝物語官名形象論―」(王朝物語研究会編『論叢狭衣物語2 歴史との往還』新典社、平成13年)で指摘した。その際藤原顕光を源顕光と誤植した。ここに訂正しておく。実資の前任者が源光であった。

(33) この間の模様は、山中裕『平安時代の古記録と貴族文化』(前掲)「第四章『御堂関白記』と『栄花物語』」及び倉本一宏『摂関政治と王朝貴族』(吉川弘文館、平成12年)「第五章藤原伊周の栄光と没落」に詳しい。なお『小右記』長徳二年五月二日条の「先是右大宰相中将候陣」を前記「平安遺文フルテキストデータベース」で検索すると「宰相中将(藤原道綱)」と出る。この宰相中将は藤原齊信であろう。齊信は同年四月二十四日参議となる。

(34) 顕光は、娘承香殿元子が源頼定に密通された事があるので、余計道綱の暴言は心底に達したことであろう。なお源頼定は綏子との密通も知られる。

(35) 倫子妹が道綱の正妻であることは『権記』(長保二年七月三日条)にも「右大將殿北方昨日亡」とあり「北方」と記されていることから明らかである。

(36) 坂本共展前掲注(1) 論考。

(37) 小学館新編全集『栄花物語①』は頭注(四一八頁)に於いて源為善を不審とし、『更級日記』勅物の「橘俊通但馬守為義四男、母讃岐守大江清通女」を挙げ、『小右記』七月十二日条に左衛門権佐とみえる橘為義ではないかとする。

(38) 新田孝子『紫式部日記』の女官名称―「弁の宰相の君」の問題―(『日本文学思潮論』桜楓社、平成3年、のち『栄花物語の乳母の系譜』風間書房、平成15年)。なお若宮の御佩刀を奉持した「弁の宰相の君」を、通説に反して豊子と別人とする指摘があつて、筆者もそれに賛する。また前記「少輔のめのと」の夫が橘為義であることを疑問視している(後著五二二頁)。

(39) 萩谷氏は『紫式部日記全注釈』(八六頁)に於いて豊子の出生を天元三年

(九八〇)とし寛弘五年現在、二十九歳と推定しているが、二十六歳の斎祇を「豊子の兄」(六〇頁)とする矛盾を犯す。また坂本氏は豊子を天元二年の誕生とし、道命と同腹と考えている。

(40) 三保サト子「道命法師伝考―飯室妙香院をめぐる―」(稻賀敬二編『源氏物語の内と外』風間書房、昭和62年)

(41) 『栄花』前篇の作者に挙げられる赤染衛門の集に道命が亡くなって後、法輪寺を訪れて詠んだ歌一首が載り、その詞書に「道命阿闍梨なくなりてのち、法輪にもうでたりしに、すみし坊にさくらの咲きたりしをみて」とある。

(42) 三条天皇と道命との関わりは、三保サト子「道命阿闍梨伝考―晩年の軌跡―」(前掲『論考平安王朝の文学』)に詳しい。以下、同氏の説の引用は同論に拠る。

なお正暦四年(九九三)五月五日東宮居貞親王帯刀陣歌合には『道綱母集』の「歌合に、卯の花」とある以下十首の題が一致し、その中五首が存する。

道綱母の代作歌だが、道綱より道命の方が可能性があらう。

(43) 伊藤博注(16)前掲書。

(44) 新田孝子前掲書は「乳付や湯殿の義に奉仕した女官も、乳母と指呼され」(五二三頁)る可能性を言い、敦成と二歳違いの敦良の湯殿の儀に於いて「共

御湯宰相乳母子傳女(御堂関白記、寛弘六年十一月二十五日条裏書)によって宰相乳母が東宮傳道綱の女子、つまり豊子だとする(五一九頁)。

(45) 新田孝子前掲書一三六―一三九頁。

(46) 角田文衛『王朝の映像』(東京堂出版、昭和45年)及び隴谷寿『源頼光』(吉川弘文館、昭和43年)『平安貴族の邸第』吉川弘文館、平成12年)

(47) 前掲隴谷(鮎沢)寿『源頼光』は道綱と頼光女の結婚は長保三年(二〇〇二)から寛弘元年(二〇〇四)の間とする。

(48) 摂津多田庄で数百人の武士団を率いていたといわれる。花山天皇出奔事件では道兼を護衛し、伊周配流事件では諸陣の警護にあたった。なお安和の変に於いては満仲は密告者だが、その弟の検非違使源満季が活躍している。

(49) 木村正中・伊牟田経久『小学館完訳日本の古典 蜻蛉日記』。また菊地靖彦『蜻蛉日記』下巻の道綱贈答歌群をめぐる―集団から集団への歌、及び代作ということに触れて―(前掲『源氏物語と日記文学 研究と資料12輯』)は、この贈答歌の時期を天元六年(九八三)から永観二年(九八四)としている。

(50) 萩谷朴『平安朝歌合大成三』(一一三)「寛弘四―七年」冬傳大納言道綱歌合」を同六年冬としたのは、田中新一『道命阿闍梨の和歌資料についての考察』(愛知教育大『國語國文學報』41、昭和59年3月)による。

(51) 三条天皇と道長との関係については、山中裕『平安時代の古記録と貴族文化』(前掲)「第二章藤原道長と摂関政治」及び加納重文「三条天皇―『小右記』の記事を中心にして―」(『講座平安文学論究第七輯』風間書房、平成2年)に詳しい。

(52) 『御堂関白記』長和四年(二〇一五)八月二十八日条に、道長が桂の山荘に女房をともなつて公卿殿上人を率いて遊んだことがみえ、中宮大夫道綱以下公卿十二名を挙げている。『小右記』にも「今日左祖国北方ヲ引率桂山莊ニ向ハル。卿相雲上人等首ヲ挙げテ追従ト云々」とある。なお二十八日の歌題は「山里に田刈る」「紅葉を翫ぶ」の二題で、『公任集』『定頼集』に二首ずつ当日の作詠が載る。

(53) 前掲『源頼光』(二〇八―二二二頁)。なお済政の息資通も頼光の娘を妻としている。管絃に秀でた家系として知られる。つまり道綱との婚姻関係も摂関家への奉仕の代償としてあったに違いないが、『蜻蛉日記』作者の息としての関心もあったのであろう。頼光は女流歌人相模を養女として、小大君とも美濃守の頃の贈答歌がある。『尊卑分脈』に「其在於武門「好和歌」と記され、見境もなく上流貴族への食い込みを目論んでいる訳ではあるまい。

(54) この贈答歌は道命歌ではなく定頼と「ある人」とのものである。なお『定頼集』の「広沢に人々いきて月のいみじうあかう池に映りたりけるに すすむ人もなき山里に池の面は宿る月さへ寂しかりけり」と、『道命集』の「ひろさはという所にまかりたり、人々ありて、いけみづのきよくもあるかなといひ

て、歌よみしに、かはらけとりて、いけ水のなからましかばやまざとにひとりや人のすむべかりける」は、同時詠であろう。

(55) 『小右記』長和五年(二〇一六)五月九日条に「院別当頼光」とあり、三条院の身辺警護にあたっていた。なお長和五年正月十八日に道命が摂津国天王寺別当に任じられたことは道綱の息としての立場と、その背後に頼光が居てこそその処遇であろう。

(56) 祖母道綱母とともに、道命は中古三十六歌仙の一人で、『後拾遺集』以下に五十七首入集している。また『梁塵秘抄』には「和歌にすぐれてめでたきは、人丸・赤人・小野小町、躬恒・貫之・壬生忠岑、遍昭・道命・和泉式部」とある。

(57) 岡一男『道綱母―蜻蛉日記芸術攷―』(有精堂出版、昭和45年)は『和泉式部集』にある帥宮敦道親王没後の贈答歌を「はずかしからぬ力量」(二四一頁)と評価している。

(58) 『大鏡』(兼家伝)に「この殿(藤原道長)は北方ふたところおはします」とある。兩人とも本妻だが嫡男誕生の妻を嫡妻として区別する。「妻」の呼称、その立場及びその子息たちの出世の違いをめぐる議論の多いところで、増田繁夫『源氏物語と貴族社会』(前掲)「摂関家の子弟の結婚」が問題点を明らかにしている。なお高群逸枝「女の結婚と財産」(『解釈と鑑賞』昭和43年4月)は、同氏『招婿婚の研究』とはニュアンスを異にし、「正妻格の倫子とは生涯その家で同居し、妾妻格の明子には生涯通ったのである」と述べている。筆者に明子を妾妻と呼ぶ認識はない。

(59) 中宮権大夫として道綱を支えていた中納言源経房(源高明男)も同年十月十六日をもって皇太后宮権大夫となる。